世界基金理事会オブザーバー参加報告

結核研究所
国際協力部副部長　杉山 達朗

2008年11月7～8日にインド・ニューデリーで開催された世界基金理事会に国際協力機構カンボジア結核対策プロジェクトのチーフアドバイザーとしてオブザーバー参加し，世界基金理事会で討議される事項・内容と世界基金と裨益国間の仕組み，パートナー機関としての役割について勉強する機会を得た。本会議は世界基金ラウンド8の承認を主な議題として開催された理事会であるが，ドナー国だけではなく裨益国（ひえきこく）やNGOまで参加して討議が行われる点はこの理事会の特徴であろう。特に，本会議前の事前会議やロビー活動で論議が活発に行われ，その内容がすぐ本会議案に反映される点も注目に値するものであった。

ラウンド８で審査された174案件のうち94案件（54％）が承認された。しかし，下位カテゴリーで承認された国は資金調達が出来次第，順次承認していくというものとなった。それぞれの疾患の採択率を見ると結核51％（29/57），HIV49％（37/76），マラリア68％（28/41），資金率はそれぞれ11％，38％，51％と疾病間でかなりの開きがあり，結核案件の資金率が低いのに加え，上位承認案件も少ない点は憂慮に堪えなかった。また，2009年1月が締切り予定のラウンド９は６月に延期され，それ以降のラウンド10の日時まで言及はされなかった。世界的な不況の嵐が吹く中で今後の資金確保が不透明であり，更にラウンド10に申請をしようとしていた国は延期されたラウンド９に申請すべきなのかを早急に決定する必要がある。世界基金が各国の感染症対策プログラム運営にとって欠く事ができなくなっており，不安材料が明確にされた理事会であったとも言えるだろう。

世界基金において技術支援といった場合，申請書作成に焦点が置かれがちである。しかし，結核分野討議であえて現在まで支援してきた国際研修による人材開発，プロジェクトを通した技術供与，ラボネットワークの実績を紹介し，現在世界基金を受けて動いている結核プログラムを円滑に進めるための技術支援の必要性を日本として訴えた。